

宋代農業史再考——南宋期の華中地域における畑作を中心として——

中 林 広 一

はじめに

本稿は南宋期の華中地域を対象として宋代農業像の再検討を行うものである。具体的には、従来作物としてのイネ、農法としての集約的農業の二点に関心を集中させることで作り上げられてきた宋代華中の農業像に対し、異なった視角からそれを捉え直すことで宋代農業のイメージのさらなる充実を図っていく。

以下、検討に移っていく前に、まずはこれまでの宋代農業史研究の動向について確認し、検討すべき課題を明示しておく。戦前より日本における宋代農業史研究は厚い蓄積を見せていたが、研究の重点は長江下流域に置かれていた。例えば、天野元之助氏や周藤吉之氏の成果は江南の農業技術について論じたものであり、また長瀬守氏や西岡弘晃氏の研究は江南デルタ地帯の農業水利について検討を行い、当地における畝田・圩田の実態を明らかにし

ようと試みるものであった。⁽²⁾

これらの研究は宋代の長江下流域における農業生産の先進性を強調するものであったが、同様の傾向は中国の研究においても見られた。占城稲を始めとする宋代の水稲作について論じた游修齡氏の成果や梁庚堯氏の研究に代表されるような畝田・圩田に関する研究は長江下流域を主たる検討対象としたものであり、また太湖周辺の地域における農業水利を取り扱った論著も枚挙に暇がない。⁽³⁾ これらの成果は膨大な数にのぼり紙幅の関係もあってとても網羅できるものではないが、そのほとんどが宋代農業における高い生産性や農業技術の進展を立証しようと試みるものであったことだけは付言しておきたい。

ところで、日本では後にこの先進性が再検討されることとなるが、その契機となったのが一九七九年に開催された「江南デルタ・シンポジウム」であった。シンポジウムにおいて高谷好一氏ら自然科学系の研究者はイネの品種や土木技術の実態などを俎上にあげて、その専門的な見地から従来の宋代江南開発像に疑義を呈され、先進性を支持する中国史研究者との間に激しい論戦を繰り広げられた。⁽⁶⁾

その後もこうした議論を受けて宋代農業史研究はさらなる深化を見せる。その中心となる研究を行ったのが足立啓二氏と大澤正昭氏であり、両氏は上記シンポジウムでの議論を踏まえた上で、宋代の江南農業の再評価を試みられた。⁽⁷⁾ すなわち、江南地域の耕地を乾田（状況に応じて水のコントロールが可能な耕地）の展開する「高地」と一年を通じて淹没する「下地」という栽培環境によって弁別し、史料中に登場する先進技術は「高地」において展開するものであったことを明らかにされ、さらにこの「高地」を上流域の河谷平野に、「下地」を下流域のデルタ

地帯に比定して、デルタ地帯の農業における先進性を否定された。

以上に示した足立・大澤両氏による成果は現時点での宋代農業史研究の到達点と見なしうるが、それらの議論は研究の対象が水稲作に限られていた点に限界が存する。確かに両氏の研究は高い農業技術が展開した地域を稲作・畑作共に営まれる河谷平野に求め、従来のデルタ地域の稲作と高い農業生産力とを結びつける宋代農業像を退けるものであったが、そこで検討の対象とされたのは主として稲作の技術であり、畑作については簡単に触れられるに止まっていた。しかし、宋代の農業について河谷平野を重視する立場から立論するならば、畑作の実態とその意義を検討する作業は欠かすことはできず、ここに畑作に関する考察が求められることになる。そこで本稿では畑作も視野に収めた上で宋代華中の農業について再検討を行っていききたい。

一 華中地域における開発志向と畑作

宋代華中の農業にまつわる諸点を検討していくに当たって、まずはその前提として華中における移住・開発の志向について確認しておこう。そして、華中の開発史の中にあつて宋代ではいかなる立地条件が好まれたのか、またそうした立地条件の下ではいかなる生産形態が選択されたのか、これらの点についてもあわせて見ておきたい。

さて、周知の通り宋代の華中地域では唐宋五代の戦乱や北宋末期の政治的・社会的混乱を受けて華北からの移住・開発が盛んに行われたが、こうした移住・開発の問題を移住先の地理的な立地条件との関わりの中で追究した成果が斯波義信氏と草野靖氏の研究であつた。斯波氏は浙江の各地域を事例として定住と開発の歴史を長いスパンで俯

瞰し、山間扇状地を拠点として低湿地へと拡大していく定住の傾向を指摘された⁽⁹⁾。また、草野氏は唐宋期の史料を博搜し、その豊富な事例を元に当時の耕地が「古田」・「新田」と呼び分けられていたこと、そして「古田」は山間や山麓の地に設けられた耕地であり、「新田」は低湿地に設けられた耕地であったことを指摘し、開発年代の新旧と地形との相関性を明らかにされた⁽¹⁰⁾。また、北田英人氏は塙という集落の立地条件を明らかにされ、上田信氏は族譜を用いて浙江省奉化県忠義郷における居住空間拡大の過程を図示されたが、これらの成果においても上流域から下流域へ展開する居住空間の広がりが見られる。

以上に示した各氏の研究からは河川の上流域で優先的に移住・開発が展開する様を読み取ることができ、当然のことながらこうした上流域における農業環境は下流域のデルタ地帯とは大きく異なっている⁽¹³⁾。デルタ地帯が平坦な地形と上流から集積する豊富な水に特徴づけられ、水稲作に適した生産環境にあったのに対し、上流域の山間地・扇状地（足立・大澤両氏の用語に従えば河谷平野）は起伏に富んだ地形と決して豊富ではないものの安定した水の供給に特徴が求められ、水稲作と畑作とを組み合わせた農業生産が行われていた。南宋の王柏が「膏腴は下にして瀕溪に在り、磽瘠は高きにして帶山に居る。下者は杭に宜しく、粳に宜しく、稂に宜しく。高者は粟に宜しく、豆に宜しく、油麻に宜しく、又其次は則ち蕎麥・芋・果・蔬・蕪なり」と溪流沿いの水田と高地の畑という対比の中で上流域の農事を描写しているはその典型であるが、こうした点を踏まえるならば、宋代の農業にとって畑作は一定の意義を有していたことが想起される。

しかし、先に触れたように従来の宋代農業史研究では畑作栽培を明確に意識した上で検討がなされることはなかつ

た。唯一の例外が周藤吉之氏による研究であるが、こうした動向は宋代の農業に占める畑作のウェイトに応じてのことではない。むしろ、畑作の重要性は当時官民双方に認識されていた。例えば、朝廷では開墾の際にムギ・アワなどの畑作物を栽培させるよう求める議論がしばしば交わされたし、また宋代の文集にも畑作の存在に言及する文章がいくつも見られる。曹彦約が言及する湖莊で傾斜地にアワが栽培され、陸九淵の赴任した荊門軍（荊湖北路）でムギ・マメ・アワといった穀物や野菜・クワ・アサが植えられていたのはそうした事例であり、中には紹慶府（夔州路）のように「本府の地産全て麦・粟の二種に仰ぎ、以って人民を養い、以って軍食に應ず」る地域も存在した。また、宋代の詩には麦秋の情景を題材としたものが数多く存することも付言しておく。以上の史料を踏まえた時、宋代の華中社会において畑作は存在感を持つ生産形態であったと見なすことが可能であろう。

無論、華中における農業環境は多様であり、長江下流域のように水稻作が盛んな地域も存した。しかし、移住・開発の基点が山地・扇状地（河谷平野）に求められたことを踏まえるならば、上流域で見られた稲作と畑作の組み合わせからなる農業経営は宋代の農業を考えるに当たって重視されねばならない。

二 農業技術普及の実態

以上に述べた点を前提としつつ、次に畑作栽培の重要性について宋代の農業技術水準の観点からも考えてみたい。宋代華中地域の農業技術については、上述したように足立・大澤両氏がその成果の中で言及されている。ここでは鏗（大ぐわ）を利用した深耕・丁寧な中耕除草・整備された灌漑施設・優良品種の利用といった特徴に宋代の農業

技術の發展を見出された。

当然のことながら、研究史上においてこれらの成果が持つ意義は大きい。それは、その成果が我々に農業技術の發展を時系列に沿って俯瞰し、中国農業史上における宋代農業の位置づけを試みることを可能にしたからである。

ただ、これらの技術が当時の社会においては先進的なものであったことには留意すべきであろう。つまり、こうした技術はその先進性故にその速やかな導入や広範な普及がただちに実現したとは見なすべきではなく、従って当該時期における農業技術の最先端を追い求める手法は宋代の一般的な農業生産のイメージを思い描く際には決して有効ではないということになる。⁽²⁰⁾

そのことは史料の扱い方からも窺われる。一例として陳塹『農書』（以下、『農書』と略称）を採り上げてみよう。一二世紀の湖州の人陳塹の手になる本書は陳塹自身の経験や見聞を元にして記された農業指南書とでも言うべき著作であり、宋代の農業を論じる上で必ずと言っていいほど言及される史料である。

そして、そこに記される農業技術の数々はこれまで宋代農業の先進性を明示する論拠として用いられてきたが、実のところこれまで本書の記載を元に議論を展開させるに当たって、本書の有する農業指南書としての性格が意識されることは少なかった。本書は陳塹の経験と見聞によって培われた最良の農業技術を提示するものであるが、その技術の数々が低い農業技術しか持ちえない農民を啓発する目的から開陳されたものである以上、少なくとも本書が執筆された一二世紀の時点で『農書』内の技術や知識が農民にとっては一般的なものでなかったと考えるのが妥当である。

無論、それらの技術・知識は机上の空論というわけではなく、実際にこれらの農法に依りつつ農事に従事している農民も存在した。さりとて、数多くの農民の間で『農書』に記された技術・知識が活用されていたかと問われれば懐疑的にならざるをえない。それは『農書』の中には各種技術の普及を疑わせる記載が散見されるからである。

例えば、薺耘之宜篇において陳勇は『詩経』や『礼記』を引用しつつ除草した雑草が緑肥として有用であることを指摘するが、その直後に「今農夫は此有るを知らず」と農民が緑肥の利用を行っていないことを慨嘆している。

当然、こうした記載の背景にあるイデオロギー性には留意せねばならない。農書や勸農文の著者は自身の主張内容を際立たせるために、主張の内容に沿った箇所についてはプラスの側面を、逆にそれに反した箇所についてはマイナスの側面を強調しがちである。それを踏まえるならば、確かに上記の引用に誇張表現が含まれている可能性は考慮すべきであるが、さりとてレトリックのためにもしいない農民の存在が捏造されたとも見なすこともまた不自然である。

また、さらに踏み込んで考えるならば、むしろこうした農民達が農村社会の中にあつて広範に見られたからこそ、陳勇には本書を執筆する動機が存したと見ることもできよう。つまり、『農書』の存在そのものが先進的な農業技術を活用しない、或いはできない農民達が社会の大半を占めていたことの証左となるわけである。

そして、こうした農民の存在は『農書』はもとより各地で地方官の出した勸農文にもしばしば登場する。そこからは史料にはなかなか浮かび上がってこない農業の現場の様子が垣間見られるが、農事の実態を反映した宋代農業像を構築していくためには、知識人達の非難する農民の姿こそ参照されなければならない。以下、本節ではこうし

た農民の事例を検討し、先進的な農業技術だけでは論じえない宋代農業の様相を追究していきたい。

さて、『農書』や勸農文を通じて窺われる農耕の特徴は二点あるが、一つは各種農業技術が農民達の中に浸透していないことである。例えば、上記薙耘之宜篇の文章は引用部分に続けて農民が刈り取った雑草を田地の外に捨ててしまうこと、この雑草は緑肥として活用できるにもかかわらずその方法が知られていないことを述べる⁽²⁴⁾。また、善其根苗篇には肥料の用い方について述べた後「人の小便を用うるに生もて澆灌し、立ちに損壊せらるるを多く見⁽²⁵⁾る」と通常なら調整してから用いるべき尿肥料をそのまま用いたがために作物に損害を生じさせた農民について言い及んでいる。こうした農民の存在は肥料の製法にまつわる知識が農民の間では共有されていなかったことを示す。

もう一つの特徴は高収量をもたらす農法に対する農民の消極性である。例えば、陳傅良は桂陽軍（荊湖南路）での耕作について「此の間、施糞を待たず、鋤耨も亦希なり。種うる所の禾麦、自然に秀茂たれば、則ち其土膏腴たるを知る」と述べ⁽²⁶⁾、施肥や中耕除草に熱心ではない農民の存在を指摘する。その前で耕起作業や施肥・除草などの作業を丁寧に行う福建路・両浙路の農業が引き合いに出されていることから、陳勇や地方官達が農民に精耕細作を求めていたことは容易に窺えるが、この史料は宋代の農村社会が必ずしもそうした理想に合致していたわけではないことを示唆している。

そして、桂陽軍の農民が農事に手間をかけようとしないう理由が粗放な農業でも一定の収量が確保できるという地の潜在的な高さにあったことは注目に値する。なぜならば、当時の農民は一定の収量さえ確保されるならば、そ

れ以上の生産性を求めようとはしないこと、従って先端技術を反映した農法は農民にとって必ずしも希求されるものではなかったことがここから窺われるからである。黄震が耕起作業や肥培管理を全く行わない「懶者」を檜玉にあげ、朱熹が時宜に外れた耕起や播種を行い、耕起や施肥を疎かにする農民を「懶惰」と称する背景にも同様の農業観を持つ農民の存在を見て取るべきであろう。⁽²⁸⁾

ところで、こうした「懶者」については既に大澤氏によって言及がなされている。大澤氏は「懶者」を農業に手間をかけず、低い生産性を副業や雇用労働によって補う人々と捉えられているが、⁽²⁹⁾ わけても注目すべきは先進技術の採用に熱心であった農民について「上等戸の下層から中等戸の上層に当たるであろう」との見解を示されていることである。⁽³⁰⁾ 残念ながら、この点について大澤氏はそれ以上深く踏み込んだ検討を行われていないが、これは農業技術の運用について社会的・経済的に高い階層の農民と集約農業を、低い階層と粗放農法とを対応させる図式で捉える見方であり、筆者もこの関係性には深く首肯するところである。そして、宋代社会を構成する民衆の大半が戸等制における四等戸・五等戸や等外の客戸などに占められていることを勘案するならば、宋代の農村社会において一般的に見られた農業は粗放なものと見なすのが自然であろう。先述したように、陳旉や各地方官が躍起になって啓蒙活動や勸農業務に従事したのもこうした粗放な農業経営が大多数を占めていたからに他ならない。これらの点を加味するならば、宋代農業の基調は粗放な農業経営にこそ見ることができよう。

以上のように宋代華中の農業技術水準が高いものであるとは言いがたい以上、それに応じて農業生産力の水準も従来の研究から得られたイメージよりは割り引いて見積もらなければならない。こと話を従来重点的に論じられて

表1：『劔南詩稿』に見える穀物の件数

作物	コメ			コムギ	マメ	アワ	キビ
	米飯	粥	計				
調理法	米飯	粥	計	餅	豆飯	—	—
春	6	5	11	9	2	3	2
夏	17	7	24	2	1	1	0
秋	45	19	64	8	5	2	4
冬	24	16	40	11	4	2	1

作物	オオムギ			ソバ	ヒエ	ハトムギ	マコモ
	麦飯	麩	計				
調理法	麦飯	麩	計	—	—	—	菰飯
春	3	2	5	0	2	0	4
夏	14	5	19	0	0	0	3
秋	2	0	2	2	1	1	5
冬	1	0	1	3	0	0	1

きたコメに限定しても、水田から得られる収量は低水準に止まる。そして、収穫物の一部が租税や小作料として徴収されることを考慮するならば、各農家が一家の一年間の生活を維持させるだけのコメを確保することは困難であろう。畑作物はそうした生産環境の中で食糧として高い重要性を保持していたと見て良い。つまり、宋代農業が低い技術水準にあるという条件の下にあって、畑作はコメの不足を補填する存在として重要な役割を担っていたことが窺われよう。

三 農村での穀物消費

前節まで宋代農業にとって畑作物の持つ意義について検討してきたが、この検討結果は利用できる史料の限界もあって十分な論証を経たものであるとはいえない。そこで本節では穀物について消費の側面から検討を行い、前節までの検討結果を補強していきたい。農村生活において日常的に利用される穀物の種類や利用の傾向を確認すること、検討結果の妥当性を検証することが可能であろう。³¹⁾

さて、農民の食生活を明らかにしていくに当たり本節では表1の検

討を中心として行っていきたい。本表は陸游の詩集『劍南詩稿』（以下、『詩稿』と略称）に登場する穀物の件数をまとめたものであり、また表内においては穀物の登場件数を利用された季節ごとに分けて示している。本表より南宋期の農村における穀物消費の傾向を分析していくが、それに先立って『詩稿』所載の詩に着目した理由について述べておこう。まず挙げるべきは陸游の詩が持つ歳時記としての側面である。⁽³²⁾

周知の通り陸游は南宋の高宗朝から寧宗朝にかけて活躍した官僚・詩人で、とりわけ積極的な抗金論者としての激烈な感情を詩に詠った愛国詩人として著名である。ただし、その文名とはうらはらに官僚としては不遇で、各地で地方官に甘んじることが多く、朝廷の召募を受けて中央の官につくことがあっても、政治状況に翻弄されて政治にかける思いを發揮することも叶わないまま免職処分にあてられている。

このように政治的に不遇であった陸游は六〇歳を越えた頃から故郷の紹興府山陰県にて過すことが多くなるが、実は『詩稿』に載せる詩の大半はこの時代に作られたものである。陸游はその一生の中で二万首前後の詩を作ったとされているが、その半数にあたる四〇代以前の作品は『詩稿』の編纂過程において陸游自身によって刪去され、『詩稿』には収載されていない。⁽³³⁾ すなわち、『詩稿』には陸游自身とその子孫達の編纂を通じて五〇代以降の作品が中心として集められており、それは必然的に陸游の山陰県退隠後の詩が多数を占めることを意味する。

そして、山陰県での生活にあつて詠まれた詩には宋の復興を願うような愛国的な詩は数少なく、むしろ陸游自身の日常生活や周辺に見受けられる農村の風景、或いはそこに生活する農民の姿が詩題として採り上げられることが多い。すなわち、『詩稿』に載せる詩の数々は農村風物詩としての色彩が強く、そこには南宋の農村社会の姿が色

濃く現れている。⁽³⁴⁾このような特徴を持つが故に陸游の詩は農村社会の情景を読み取るのに適した素材であると言える。

『詩稿』に着目するもう一つの理由は時系列に沿った編纂という編集上の特徴にある。『詩稿』に載せる詩は陸游自身やその子孫達の手によって作成順にまとめられているが、この時系列にそった配列がなされているために、陸游の詩は作成時期を特定することが可能である。特に錢仲聯氏による綿密な考証はそれぞれの詩について、詳細なものでは月単位で、そうでないものも季節単位で作成時期を明らかにしているが、⁽³⁵⁾こうした成果を援用すれば、『詩稿』に見える各種作物の利用を季節ごとに分析することも可能となり、単なる計量的な分析に止まらず食の季節性をも検討内容に加えた新たな成果を生み出すことが期待できよう。数ある詩文の中から『詩稿』を採り上げて検討行うのはこうした特徴に拠るところが大きい。

以上の点を踏まえた上で次に表の検討に移っていこう。

(1) 食の季節性

さて、本表の内容に現れる穀物利用の特徴はいくつかあるが、特記すべきは主食として食される穀物の多様性である。表に見える穀物にはコメの他にムギ・マメ・ソバ・マコモ・アワ・キビなどがあり、陸游を始めたとした山陰県の農民の食卓に上がる穀物がコメだけには限られず、実に多様な作物によって構成されていることがそこから窺える。

こうした食生活は従来の研究では指摘されることはなく、我々の持つ日常生活のイメージからかけ離れたものであるが、それではなぜ数多くの作物が利用されていたのか。そしてそのような利用形態はいかなる意味を持つのか。それを考える際の鍵となるのが利用作物の季節性と階層性という特徴である。

まずは季節性について見ていこう。表中の各作物について利用傾向を見てみると、いずれの作物も一年を通じて一定の利用頻度をもって利用されることはなく、季節ごとの利用にばらつきが見出される。例えば、コメ利用の事例数（米飯＋粥の事例数）は秋に六四例、冬に四〇例と高い数値を示しているのに対し、春と夏の数値は低い。とりわけ春季の利用事例は少なく、一年の内でも春はコメの消費量が最も落ち込む季節であることが窺われる。

それでは、ムギの消費はどのような傾向を示すのか。ここではオオムギの数値を参考にして見ていくが、⁽³⁶⁾そこからは秋と冬の事例数はそれぞれ二例・一例と極端に少ないものの、春に五例とやや上昇し、夏には一九例と利用頻度が格段に高まる傾向が見出される。すなわち、春と夏に利用頻度が落ち込んだコメとは対照的な消費傾向がムギにはあることになる。

こうした作物利用の季節性から示されるのは様々な作物を組み合わせることによって初めて成立する農村の食生活である。このことを具体的に見ていくにあたって、コメの利用を起点として考えてみよう。イネの栽培サイクルは早稲・晩稲などその品種によってずれがあるが、利用事例が秋季（新暦八月～一〇月、以下全て新暦で示す）に一番高い数値を示していることからして、山陰県では晩稲が多く栽培されていたと理解される。収穫されたコメは一定の量が租税や小作料として国家や地主に徴収されるが、それでも収穫直後にあつてはコメの貯蔵量も十分にあり、

表も示すように新米が盛んに食されていた。

その後日常的な消費を通じてコメは次第に貯蔵量を減らしていくものの、収穫からさほど時間の経過していない冬季の時点では利用事例は四〇例と決して少なくはなく、依然としてコメが消費され続けていたことが想起される。

こうした食生活は春季に差し掛かると変化が訪れ、一一例と事例数は急激に減少する。「粟困久しく尽き遺粒無⁽³⁷⁾し」・「粟粟継かざるを以つて遂に粥を食するを罷⁽³⁸⁾む」などの言葉に示されているように、その背景にあったのは収穫以来日常的に食べ続けてきたコメが底をつき始めるといふ事態である。いわゆる端境期の到来をここに見て取ることができ、春から夏にかけての農村はよほどの富裕層でもない限りこうしたコメの欠乏に見舞われる。

ところで、夏季における利用事例は二四例と春季より増加しているが、これは早稲の収穫によるところが大きい。詩の中に早稲の一品種である六十日白が登場し、夏季の新米として取り扱われていることからそれは窺われる。⁽³⁹⁾早稲の収穫を六月の終りから七月の上旬にかけてのこととすると、コメの端境期は春から六月頃にかけてのことと見て見ることができよう。

以上に示したコメ利用の年間サイクルを勘案すると、春季に端境期を迎えてから六・七月の早稲の収穫に至るまでの時期が最も窮乏した時期であることになる。そして、生活を維持していく上ではこの窮乏のいかに対処するかが重要になってくるが、陸游の詩からはその際に採られた方策として二つの方向性が看取される。

一つはコメを食べ尽くす時期を先延ばしにしようとする方向性である。表に即して言えば豆飯・菰飯の存在がそれにあたる。豆飯はコメにマメを加えて炊いたもので、「農を為して飯を得るは常に半菽⁽⁴⁰⁾」との句からして農民の

間では一般的な食品であった。⁽⁴¹⁾ また、菰飯も豆飯と同様の調理法を採るもので、マメの代わりにマコモの種子（ワイルドライス）を用いたものである。

このような調理法の採用は、コメにコメ以外の作物からなる増量材を加えて調理することで消費されるコメの量を節約し、コメを食いつないでいくことを目的としている。また、増量材の量もその時の状況に応じて調節されていた。「飯を得るも菰米を多くす」との句からはマコモの占める割合の多い菰飯の利用を見て取ることができるが、この句が夏場に詠まれているのは示唆的である。このような調整を行いつつコメの貯蔵量をコントロールし、コメの底をつく時期を早めることないよう努める農民の工夫がこの調理法には働いている。

もう一つは食べつくしたコメの代替物となる作物を求める方向性である。そうした作物として重宝されるのがムギである。前述したようにムギの利用事例数は春・夏に高く、特に夏季には二一例と高い数値を示すが、これはコムギやオオムギの収穫時期に対応したものである。コムギやオオムギの栽培サイクルは一〇月から十一月にかけて播種し、翌年の春の終りから夏にかけての時期に収穫するのが一般的であるが、それはちょうど春から夏にかけて起こるコメの欠乏を補う作物としては理想的な存在であった。そのことは「旋春せる麦麩は家餐を続ぐ」⁽⁴³⁾、「麦飯葵羹は能く継ぐを貴ぶ」⁽⁴⁴⁾などの句から窺い知ることができるし、ムギが春の飢餓を救う作物であることが熟知されているからこそ、「人言う麦信に春來の好」⁽⁴⁵⁾、「麦熟し家家喜びて涎を墮す」⁽⁴⁶⁾など人々のムギに対する感情を詩中に見ることができる。表に現れる春・夏のムギの盛んな利用は、以上のような作物の特性との関わりで捉えることができる。

ここでムギの利用について具体的にしておく。これまで類縁種の総称としてムギの語を用いてきたが、周知の通りムギにはコムギ・オオムギ・ライムギ・エンバクなど複数の品種が存する。このうち陸游の詩に登場するムギはコムギとオオムギの二種である。

陸游が食したコムギの食品としては湯餅・蒸餅・饅頭・餛飩があるが、このような南宋期のコムギ利用については既に周藤吉之氏によって詳細な検討がなされており、陸游によるコムギの盛んな利用が特異なものではないことはそこから窺い知れる⁽⁴⁸⁾。

ただし、ムギの利用はコムギのみには限られず、オオムギもまた農村では重要な食糧であった。そのことを示すのが麦飯の存在である。オオムギをそのまま炊くか或いはコメを加えて炊いて作る麦飯はかつて日本の農村社会でも広く食べられたものであるが、表中の二〇例という麦飯の事例数は宋代の華中社会でも食されていたことの証左となる。表の中では事例数が少ないものの、陸游の詩には「韭壘麦飯日び餐⁽⁴⁹⁾」と日常的に麦飯を食す様子を窺わせる句や、「家家に麦飯の美きあり⁽⁵⁰⁾」と麦飯が周辺⁽⁵¹⁾の農家の間で広く食されていた様子を示す句が見出される。このように麦飯を詠み込んだ詩は陸游以外の詩人にも存することから、農村⁽⁵¹⁾にあつて麦飯の利用は一地域に限定された現象ではなく、ごく一般的なことであつたと言いうる。

これに加えて、オオムギの持つ日常的な作物という性格も強調しておきたい。すなわち、コムギが日々の食事のみならず、節日や客人の来訪といった非日常的な状況にあつても供される作物であつたのに対し、⁽⁵²⁾麦飯や麩(ムギコガシ)のようなオオムギの食品が特別な状況において利用されることはなく、オオムギはもっぱら日常的な食事

の場で利用される作物であった。こうしたコムギとオオムギの利用状況を比較すると、コムギが外向きの性格も有した作物である半面、オオムギが内向きの性格のみを有していたことが導き出され、そこからオオムギは日常生活に密着した作物として位置づけられよう。

(2) 食の階層性

さて、以上に示した食の季節性に加えて本表からもう一つ読み取れるのは食の階層性である。それを確認するために、以下ソバの利用について見ていこう。まず、本表でのソバの利用事例数を確認してみると、それは五例に止まりコメやムギの事例数と比べてかなり少ないことが分かる。一方で、陸游の詩にあつてソバが栽培されている風景はしばしば描写の対象となつており、⁽⁵³⁾華中の農村においてソバの栽培は決して稀なことではなかつたことが想起される。すなわち、陸游の取り扱うソバには食物の事例と栽培の事例との間に落差を見て取ることができるといえる。

また、ソバについてはもう一点特徴が見られる。それは陸游自身のソバに対する消極性である。実のところ、ソバを詠んだ詩の中で陸家の食卓にソバが登場する事例は一例（巻六四初冬絶句）にとどまる。他の事例のうち二例は他人の提供するソバ料理の相伴にあづかつたことを示すもの（巻三三贈湖上父老十八韻・巻三三題庵壁）、二例は農家の風景を主題としたもの（巻七三秋冬之交雜賦・巻七八農家）であつて、陸游自身はソバをそれほど食していなかつたことがそこから窺われる。ソバをめぐるこれらの特徴はどのように理解すればよいのであろうか。

こうした問題を解くための鍵になるのがソバと貧困との強い関わりである。陸游の詩の中からソバと生活環境と

の関わりを明確に知りうることはできないが、それでもいくつかの詩には、断片的ではあるが、両者の関連を示す記載を見出しうる。例えば、前掲「贈湖上父老十八韻」において陸游は知己の父老を迎え入れられてソバ粉で作った餅を振舞われるが、父老の家が「貧舎」と称されていることからして、父老自身は決して裕福な暮らし向きのもとなつたわけではないことが窺い知れる。また、「農家」は農家一般の細かな暮らしぶりを描写した連作であつて、特定の農家をモデルにしたものではないと推測されるが、そこでソバの餌を食する農家は「豪家」の「督債」を受ける存在であること⁽⁵⁵⁾から、富農とは言いがたい地位にあつたと考えうる。

これらの詩に示されているのは明らかにソバと貧困との関係の深さである。筆者も先に指摘したようにソバは一般的に忌避される傾向にあつた。栽培を積極的に行う人々の多くは貧困層に属し、富農にとってソバはイネやマメが水害等で栽培できない状況に陥つた際に代替作物として栽培される作物であつた。⁽⁵⁶⁾

官職を退いた後の陸游は決して裕福な経済状況のもとにあつたわけではないが、朝廷より祠禄を受けていたことに加えて、自身の所有する畑を耕して野菜を栽培し、また村医者や寺小屋の教師・代書屋などの副業を持っていたこと⁽⁵⁷⁾から、極貧の生活を送っていたわけでもないことが窺われる。⁽⁵⁸⁾すなわち、『詩稿』に登場するソバの事例の少なさは、陸游がソバを利用せねばならないほどの貧困を託っていないことが原因が求められよう。

このような食物と階層性との関わりについては他の史料からも窺い知れる。北宋期の史料ではあるが、孔仲武は荊湖路の状況を「竊に以うに、湖南地方の民財は江西の処と等しからず。大抵美壤少くして瘠田多し。故に戸口衆きと雖も、而れども民富まず、年り有るに遇うと雖も、中家菽と粟を食すを免かれざれば、則ち其厚薄は知るべし」

と述べている。⁽⁵⁹⁾ここではアワやマメの利用について触れられているが、特に注目すべきは「中家菽と粟を食すを免かれざれば」とする表現である。こうした表現はアワやマメが本来中流の家庭ならば主食として利用されないことを前提としていなければならぬものであり、従って一般にアワやマメは貧困層の食する穀物であったことが分かる。また、南宋中期の人舒璘は「貧民・下戸、陸種に仰給する者尤も衆し⁽⁶⁰⁾」と記していることから、貧困層と畑作物とは深い関わりの下にあったと考えるべきであろう。

以上、『詩稿』に見える作物利用の姿を中心として南宋期の農村における日常食の様相を検討してきた。そこから窺われるのは利用される作物の多様性であり、またその背景としての作物利用の季節性と階層性であった。

そして、こうした特徴が示すものは農民たちの食生活がコメのみで成立していたわけではないという実態である。確かに表に現れる事例数だけで判断するならば、食生活の中にあつてコメは最も重要な作物であつたことは間違いない。しかし、表中に示される作物利用の傾向はコメ利用の恒常性を否定している。作物利用の季節性はよほどの富農でもない限り収穫されたコメは翌年の夏までには尽きてしまうことを示唆しており、また階層性の存在は生産性の低下に伴つてコメ利用の頻度も低下し、コメ以外の作物に対する依存度が上昇していったことを示している。

すなわち、都市民や一部の富農を除くと宋代においてコメのみをもつて年間を通じた再生産活動を維持することは困難であつた。それ故にコメの不足分を補うべくムギを初めとした畑作物が盛んに利用されたわけであり、ここに農村社会における畑作の重要性を看取することができよう。

おわりに

以上、畑作という要素を中心としつつ宋代華中の農業生産について再検討を行った。検討内容をここで具体的に繰り返すことは避けるが、宋代華中農業像の前提として農書や勸農文に見られる先端技術が当時の一般的な農業の姿を体现するものではないという現実が存し、またそれ故に稲作の生産力水準は決して高いものではなく、一年を通じてコメを消費できる階層は極めて限られていたこと、こうしたコメの不足分を補う必要もあつて華中社会には畑作物に対する高い需要が存したことを指摘しておきたい。⁽⁶¹⁾

これらの諸点は宋代華中の農業生産について検討する際に重要な意味を持つものであるが、無論それを宋代の華中社会全般に適用するのは誤りである。江南デルタ地帯に代表されるように水稲作が畑作を遥かに優越する環境も多々見られたわけであり、宋代華中の農業生産についての具体像を提示するためには地域性に配慮した検討が必要であろう。この点は今後の重要な課題として検討されなければならない。

註

- (一) 天野元之助「陳旉の「農書」と水稲作技術の展開(上)」
 『東方学報』一九、一九五〇、「同(下)」(『東方学報』
 二二、一九五二)、「宋代の農業とその社会構造」(『人文研
 究』一四一六、一九六三)、周藤吉之「宋代の圩田と莊園
 制」(『東洋文化研究所紀要』一〇、一九五六、のち補訂し
 て『宋代経済史研究』(東京大学出版会、一九六二)に再
 録)、「南宋稲作の地域性」(『史学雑誌』七〇一六、一九六
 一、のち補訂して『宋代経済史研究』に再録)、「南宋に於
 ける稲の種類と品種の地域性」(『宋代経済史研究』東京大

学出版会、一九六二)、「宋代浙西地方の畝田の発展——土地所有制との関係——」(『東洋文化研究所紀要』三九、一九六五、のち補訂して『宋代史研究』(東洋文庫、一九六九)に再録)。

(2) 長瀬守「北宋末における趙霖の水利政策」(『東洋史学論集』二、一九五四、のち「北宋末における趙霖の水利学とその展開」に改題して『宋元水利史研究』(国書刊行会、一九八三)に再録、「北宋における江南太湖周域の水利学」(『琉球大学法文紀要』二二、一九七九、のち「宋代における単鏹の水利学」に改題して『宋元水利史研究』に再録、「宋元時代江南デルタにおける水利・農業の技術的展開——華北との対比において——」(『歴史人類』九、一九八〇、のち「宋元水利史研究」に再録)、西岡弘晃「宋代蘇州における浦塘管理と畝田構築」(中国水利史研究会編『佐藤博士還暦記念中国水利史論集』国書刊行会、一九八一、のち『中国近世の都市と水利』(中国書店、二〇〇四)に再録)。

(3) 游修齡「占城稻質疑」(『農業考古』一九八三一一)、
「宋代的水稻生産」(『中国水稻科学』一九八六一、共に
のち『稻作史論集』(中国農業科技出版社、一九九三)に
再録)。

(4) 梁庚堯「北宋的圩田政策」(国立台湾大学歴史学系編『世変、群体与個人』国立台湾大学歴史学系、一九九六、のち『宋代社会経済史論集』上(允晨文化実業、一九九七)に再録)。

(5) 差し当たってここでは繆啓愉『太湖塘浦圩田史研究』(農業出版社、一九八五、鄭肇経主編『太湖水利技術史』(農業出版社、一九八七)、太湖地区農業史研究課題組編著『太湖地区農業史稿』(農業出版社、一九九〇)、魏高山『太湖流域開発探源』(江西教育出版社、一九九三)などを挙げるに止めておく。

(6) 渡部忠世・桜井由躬雄編『中国江南の稲作文化』(日本放送出版協会、一九八四)。

(7) 足立啓二「宋代両浙における水稻作の生産力水準」(『熊本大学文学部論叢』一七、一九八五、「宋代以降の江南稲作」(高谷好一編『稲のアジア史』二、一九八七)、大澤正昭「蘇湖熟天下足」——「虚像」と「実像」のあいだ」(『新しい歴史学のために』一七九、一九八五、のち「宋代「江南」の生産力評価をめぐって」に改題して『唐宋変革期農業社会史研究』(汲古書院、一九九六)に再録)、「宋代「河谷平野」地域の農業経営について——江西・撫州の場合——」(『上智史学』三四、一九八九、のち『唐宋

変革期農業社会史研究』に再録)。なお、以下大澤氏の成果の引用は『唐宋変革期農業社会史研究』の頁数による。

- (8) これ以降も中国では宋代農業史に関する研究は盛んになされ、足立・大澤両氏の成果に対して宋代の江南デルタ農業の先進性を強調する研究も見られる(例えば、李根蟠「長江下游稻麦複種制的形成和発展」(『歴史研究』二〇〇二・一五)など)。しかし、それらの研究に「高地」・「下地」の別に着目した両氏の論点に正面から批判を加えたものは見受けられず、両氏の研究を批判的に発展させた成果は未だ現れていない。

- (9) 斯波義信「浙江湖州における定住の沿革」(木村英一博士頌寿記念事業会編『中国哲学史の展望と模索』創文社、一九七六)、「唐宋時代における水利と地域組織」(星博士退官記念中国史論集編集委員会編『中国史論集』星斌夫先生退官記念事業会、一九七八)。

- (10) 草野靖「唐宋時代に於ける農田の存在形態(上)」(『法文論叢』三一、一九七二)、「同(中)」(『法文論叢』三三、一九七四)、「同(下)」(『熊本大学文学部論叢』一七、一九八五)。

- (11) 北田英人「中国太湖周辺の『塙』と定住」(『史朋』一七、一九八四)。

- (12) 上田信「地域の履歴——浙江省奉化県忠義郷——」(『社会経済史学』四九・二、一九八三)。

- (13) 流域ごとに異なる生態環境とそれに応じた定住・生産の傾向については斯波義信『宋代江南経済史の研究』(汲古書院、一九八八)一六九〜一七四頁を参照。

- (14) 『魯齋集』卷九水災後劄子

膏映在下面瀕溪、磽瘠居高而帶山。下者宜杭宜稷宜秬、高者宜粟宜豆宜油麻、又其次則蕎麥・芋・果・蔬・蕒。

- (15) 「南宋に於ける麦作の奨励と二毛作」(『日本学士院紀要』一三・一四・一、一九五五、のち補訂して『宋代経済史研究』(東京大学出版会、一九六二)に再録)。

- (16) 例えば、『建炎以来繫年要録』卷八七紹興五年三月辛卯条に見える陳桷の「臣願勅分屯諸帥、占射無主荒田、……因地所宜種麻・粟・稻・麦」という発言など。

- (17) 『昌谷集』卷七湖莊創立本末与後溪劉左史書
有田百畝。或雜於其間、或繞其旁、取秬稻於下濕、課粟於坡阜。

- (18) 『象山先生全集』卷一六与章茂徳
此間田不分早晚、但分水陸。陸田者只種麥・豆・麻・粟、或蒔蔬栽桑、不復種禾。水田乃種禾。

- (19) 『字溪集』卷二与紹慶太守論時政書

照会、本府地産全仰麦粟二種、以養人民、以応軍食。

(20) かつて李伯重氏はマーク・エルヴィン氏の説に依拠しつつ、技術の進展について検討するに当たっては技術の発明・生産現場での採用・普及の三区分を念頭に置くことが必要であるとされたが（『江南農業的發展（1620～1650）』（上海古籍出版社、二〇〇七）、四六頁）、農業史研究においてこうした見解は傾聴に値するものと言えよう。

(21) 陳勇『農書』の詳細については大澤正昭『陳勇農書の研究』（農山漁村文化協会、一九九三）を参照。

(22) 陳勇『農書』薙耘之宜篇

詩云、以薙茶蓼、茶蓼朽止、黍稷茂止。記礼者曰、仲夏之月、利以殺草、可以糞田疇、可以美土疆。今農夫不知有此。乃以其耘除之草、拋棄他処、而不知和泥渥濁、深埋之稲苗根下、漚罨既久、即草腐爛、而泥土肥美、嘉穀蕃茂矣。

(23) 例えば、陳勇は天時之宜篇にて「今人雷同し、建寅の月朔を以て始春と為し、建巳の月朔を首夏と為す」と農民を非難しているが、この記述を通じて当時農民が独自の曆に基づき農業を行っていたことを読み取ることができるとも、祈報篇の「今農に従事する者は類ね然ること能わず……烏んぞ能く悉く先王の典故を循用せんや。其春・秋二時の

社祀に于いては僅かに能く之を挙ぐるも、祈報の礼に至りては蓋し蔑如たるなり」との言からは、農民の間で儒教に基づいた祭礼がないがしろにされていた一方で土地神に対する祭礼は執り行われていたという農村社会における実態が窺われる。

(24) 註(22) 陳勇『農書』。

(25) 陳勇『農書』善其根苗篇

若不得已而用大糞、必先以火糞久罨、乃可用。多見人用小便生澆灌、立見損壞。

(26) 『止齋先生文集』卷四四桂陽軍勸農文

閩浙之土、最是瘠薄。必有鋤耨數番、加以糞溉、方為良田。此間不待施糞、鋤耨亦希。所種禾麥、自然秀茂、則知其土膏腴。

(27) 『黃氏日抄』卷七八咸淳八年春勸農文

撫州勤力者、耘得一兩遍、懶者全不耘。……撫州勤力者、斫得些少柴草在田、懶者全然不管。

(28) 『朱文公文集』卷九九勸農文

土風習俗大率懶惰、耕犁種蒔既不及時、耘耨培糞又不尽力。

(29) 大澤註(7)「宋代「河谷平野」地域の農業経営について」二七〇～二七二頁。

(30) 大澤註(7)「宋代「河谷平野」地域の農業経営について」二七五頁。

(31) 朱瑞熙ほか編『宋遼西夏金社会生活史』(中国社会科

学出版社、一九九八)のように宋代の日常食について触れる論者はままた見受けられるが、大半は食品の羅列に終始したものであり、宋代社会と日常食との関わりにまで踏み込んだ検討が行われることはない。そうした中で斯波義信氏の研究は江南地方の民間の主穀について検討を行い、宋代にはコメの品種も数多く確認され、特に占城稻を始めとする低品質のコメは貧しい農民など低い階層の人々の間で食されたことを明示するなど示唆に富む(『宋代商業史研究』

風間書房、一九六八、一四九〜一五二頁)。斯波氏の提示されるコメの重要性についても筆者は大いに首肯するところであるが、一方でこの議論においてコメ以外の作物の利用実態が踏まえられていない点には注意を要する。すなわち、斯波氏の見解は日常食の総体を反映したものであると言いがたく、さらなる検討が必要とされよう。また、同様

の理由により篠田統氏の成果(『中国食物史』柴田書店、一九七四)も全面的に依拠できるものとは言いがたい。

(32) 以下、陸游に関する事柄は一海知義氏の解説(『陸游』岩波書店、一九六二、のち補訂を加えて『陸游詩選』(岩

波書店、二〇〇七)及び『一海知義著作集』三(藤原書店、二〇〇九)に多くを拠る。なお、本稿では著作集版を参照した。

(33) 『詩稿』の編纂過程については村上哲見「陸游一劍南詩稿」の構成とその成立過程(小尾博士古稀記念事業会編『小尾博士古稀記念中国学論集』汲古書院、一九八三)を参照。

(34) 一海氏はこうした特徴から陸游の詩に「信頼すべき大部な百科事典、あるいは含蓄の深い農村歳時記としての役割をはたす」(註(32)解説、二九頁)との評価を与えられている。

(35) 錢仲聯『劍南詩稿校注』(上海古籍出版社、一九八五)。

(36) 表中にコムギの数値は掲げてあるものの、実のところコムギの数値は日常食の実態を導き出せる性質のものではない。それは後述するようにコムギは日常的な利用に加えて節日や祭礼、或いは客人の訪問などの機会に供される事例が数多く存し、詩に詠われるコムギの消費が農民の日常的な食事を反映したものが否かを明確に分類することは困難であることによる。そのためここではコムギの数値については分析の対象としない。

(37) 『詩稿』卷二九閔雨

粟困久尽無遺粒、淚席膏沾有旧痕

(38) 『詩稿』卷五一晨起、自注

近以病後、晨糜蔬書、又以糜粟不繼、遂罷食粥。

(39) 『詩稿』卷三三立秋後四日雨

杯泛鵝兒供小啜、碓春雲子喜新嘗

『詩稿』卷五七野飯

六十日白可統飯、三千年清向与人 堪笑此翁頑似鉄、還

山又食一番新

(40) 『詩稿』卷五四飯飽昼臥戲作短歌

為農得飯常半菽、出仕固應甘脫粟

(41) 豆飯の語は『漢書』翟方進伝の出典から貧困の象徴として利用される場合が多く、詩に登場することが即座に実

際の豆飯の利用を示すとは限らない。ただ、陸游の詩には

「豆飯は沙塲を雜う」(卷四三対酒)・「俄に豆飯の熟するを報ず」(卷五〇齋中雜題)・「軟炊せる豆飯日を支うべし」

(卷六九泛舟過金家埭贈売薪王翁、第四首)と実際に豆飯を食べていたことを想起させる表現も見受けられるので、

豆飯の語は決して修辭上の表現のみにはとどまらず、現実の食生活も反映するものであったと考へても差し支えなからう。

(42) 『詩稿』卷四五貧居

得飯多孤米、烹蔬半菜苗

(43) 『詩稿』卷二一梅雨

剩采芸香辟書蠹、旋春麥麩統家餐

(44) 『詩稿』卷六七菴中紀事用前輩韻

山僧野叟到即留、麥飯羹羹貴能繼

(45) 『詩稿』卷三八春日小園雜賦

人言麥信春來好、湯餅今年慮已寬

(46) 『詩稿』卷四三雨夜

麥熟家家喜墮涎、龜堂依旧突無煙

(47) 餅は小麦粉製品の総称であり、その内容は加熱方法の違いに応じて湯餅・蒸餅などのジャンルに分かれる。餠飩・餠飩は湯餅・蒸餅の一種であり、それぞれ現代の「ほうとう」・「ワンタン」に連なる食品である。

(48) 周藤註(15)論文。ただし、周藤氏の研究は都市における利用に重点が置かれており、またオオムギの利用に対する検討も限定的であつて意を尽くしたものであるとは言いがたい。

(49) 『詩稿』卷二二自笑

自笑胸中抵海寛、韭菹麥飯日加餐

(50) 『詩稿』卷三〇時雨

家家麥飯美、处处麥歌長

(51) 例えば、「田舎人忙麦飯香」〔秋崖集〕卷八山中・「今年麦飯滑流匙」〔宮教集〕卷二喜晴・「旋炊麦飯非常飽」〔頤庵居士集〕卷下雨後訪田家 など。

(52) 例えば、立春の日には餅や餠飴が食され〔詩稿〕卷三五北園雜詠、第四首・卷五六対食戯作・卷六一自開歲陰雨連日未止)、また病から回復して久しぶりに近隣を散策した陸游を村人が喜びもてなした際に酒と共に供されたのも餅であった〔詩稿〕卷二七秋晚閑歩隣曲以予近嘗臥病皆欣然迎勞)。

(53) 例えば「蕎麦初熟刈者滿野喜而有作」〔詩稿〕卷一九など。

(54) 『詩稿』卷三三贈湖上父老十八韻

貧舍有盤飧、勿責異味重 麴甃新油香、黍酒甕面濃

(55) 『詩稿』卷七八農家、第五首

油香麴餌脆、人靜布機鳴 畧吏催科簡、豪家督債輕

(56) 「中国におけるソバについて」〔史苑〕六六一、二〇〇五)、「中国におけるソバ食について」(木村茂光編

『雜穀Ⅱ——粉食文化論の可能性』青木書店、二〇〇六)。

(57) 陸游の經濟狀況については一海註(32)解説及び一海知義「村医者・寺小屋・村芝居——陸放翁田園詩ノート(二)」〔近代〕五七、一九八一、のち「一海知義著作集」

三(藤原書店、二〇〇九)に再録を参照。

(58) 無論、『詩稿』には自身の貧しさを嘆く詩が多々見られるが、自身の邸宅や耕地を所有していたことや、畑の耕作を担う下男や家事を行う婢を雇うだけの金銭的な余裕があったことから経済的には最下層に属していたとは言いがたい。

(59) 『清江三孔集』卷一六代上執政書

竊以、湖南地方民財不与江西処等、大抵美壤少而瘠田多。故戸口雖衆、而民不富、雖遇有年、中家不免食菽与粟、則其厚薄可知。

(60) 『舒文靖集』卷下与陳倉

矧此邦山多田少、貧民・下戸仰給于陸種者尤衆。

(61) こうした点を勘案すれば、大澤氏や長井千秋氏の採られた、コメのみを対象として穀物消費量を算出し、その数値を前提に小農家庭の再生産活動を論じる手法についても修正の必要がある。両氏の研究については大澤註(7)「宋代「河谷平野」地域の農業経営について」及び長井千秋「南宋時代江南の小農経営と租税負担」〔東洋史苑〕四七、一九九六)を参照。

(立教大学非常勤講師)